
シークレットナイトライド3

西村真琴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シークレットナイトライド3

【Nコード】

N9083X

【作者名】

西村真琴

【あらすじ】

CMD社の新商品インテリジェントパワーLSIが有機半導体パネルメーカーOSLED社に採用されることが決定した。

低コストで半永久寿命を持つチャージパワーデバイスと有機半導体フィルムデバイスの共同開発にCMD社の真田は乗り出す。

デバイスの生産拠点は中国に決定、中国工場での開発試作が始まった。

開発ソリューションの応援依頼を受けた新光技術工業社の神崎は部下と共に中国に飛ぶ。そこでは、半導体フィルムを使用した電子新聞紙の開発が進んでいた。

ある日、神崎は新デバイスの製造に必要な画期的な元素を発見するのだが・・・技術情報を狙う何者かが密かに潜入していることに気付いた神崎にふたたび危機が迫る

プロローグ（前書き）

すみませんが、この作品は気まぐれ者のサラリーマン素人作家が思いつきで書いておりますのでストーリーがなかなか進展しません。気長に待てる人だけがお読み下さい。以上、よろしくお願い致します。

ブローグ

空港を飛び立ってから10分程経っただろうか、小さな四角い小窓の向こうには果てしない雲海が広がっていた。

ポーンとスピーカーから音が鳴って座席ベルトの着用サインが消えると機長の挨拶がアナウンスされた。

「皆様おはようございます。機長の田中です。本日はANA航空をご利用頂きましてありがとうございます。本日の天気は晴でございます。当機は成田を離陸致しまして、ただ今、静岡上空を通過中でございます。本日のフライトタイムは約2時間15分を予定しております。ごゆっくり空の旅をお楽しみください。」

日本語でのアナウンスが終わると、中国語でのアナウンスが入った。

「女士們 先生們 早上好 歡迎光臨．．．e t c．．．謝謝」

神崎は安全ベルトの金具を外すと窓の外を眺めた。

「神崎さん、雲海ってとっても綺麗ですね」

「ああ、そうだね、雲海って、まさに天空の海だからね」

神崎はそう言つと窓側の座席で楽しそうに外を眺める相川真理の横顔を見た。

第一章 胎動

真田はクリーンルームのガラス窓の外から新商品インテリジェントパワーLSIの接合試作を眺めていた。

クリーンルームは試作用の汎用半導体組立装置が各工程ごとに省スペースで設置されていて、ウエハーからチップを切り出すダイシング装置、チップをサブストレートに接合するダイボンダ装置、チップとサブストレートの電極接合を行うワイヤボンダ、フリップチップボンダ装置、封止を行うモールド、アンダーフィル、ポッティング装置等がぎっしりと並んでいた。半導体パッケージの出来栄を評価する為の評価装置、解析装置、基板実装装置、信頼性評価装置も設置しており、この小さなクリーンルームで各種半導体の後工程組立製造が全て出来る様になっている。

ダイはチップと同じ意味。

サブストレートはチップを固定する為の基材。

モールド、アンダーフィル、ポッティングは封止工法名。

クリーンルームの中では新光技術工業社の石川がCSPとフレキシブル基板電極の接合実験をしていた。

石川は腕を組みながらCMD社の組立プロセス技術メンバーと電極接合装置の前で接合条件の確認をしている。

CSPはチップサイズパッケージの略号

「この部屋のクリーンレベルはどれ位ですか？」

真田は振り向くと、後ろから話しかけた劉麗華の顔を見た。

「クラス1000や」

「まあまあですね」

「そや、まあまあやな、それでも半導体の組立工程としては充分な環境クラスや、高い方とちゃうか」

「そうですね、クラス100でしたら拡散も出来るレベルですね、充分だと思います」

「へえ、劉さん、結構知ってるんやなあ、半導体のこと勉強してるんか」

「いえ、会議で通訳していると自然に覚えてしまっんです」

「ええこつちやがなあ、ただ勉強出きるんやさかいな、ハハハ」

クラスとはクリーンルームのクリーンレベルを示す。値は低い方が良い。

真田は劉にそう答えると通路を歩き始めた。

劉麗華はC M D上海有限公司の美人通訳だ。容姿は長身で見事な長い黒髪は頭の後ろで束ねている。

彼女は真田からの依頼を受けて本日の午後に予定された会議の通訳として中国から来日していた。

「劉さん、せつかくの出張やさかい、日本の半導体組立工程を見学していくか？」

「えっ、いいんですか、真田さん？」

「ああ、後工程だけやけどな、前工程は情報セキュリティAAAやさかい無理や」

「是非、お願いします！ 日本の組立量産工程が見られるなんて機会がありませんから」

「いや、量産工程は無い」

「えっ？」

「汎用半導体の量産工程は全て海外に移管したんや、あるのは試作工程だけや」

「えっ、日本は量産をしていないのですか？」

「ああ、量産は全て海外や、日本で作ってもコストが合わへんねん」
「そうなんだあ、知らなかった」

「量産工場は中国がナンバーワンや、悪い言い方やけど日本は半導体の後工程を捨てたんや、さらに試作工程もこれから中国に移管して、半導体パッケージの設計開発から試作も全て中国でやることになるんや」

「後工程の設計開発もですか？」

「ああ、そうや、そして・・・」

「そして？」

「俺が中国の開発本部長になる予定や」

「ええっ！」

「麗華、俺の部下になってくれへんか？」

「私ですか・・・」

「だめか？」

真田は照れくさそうに頭を掻いた。

「いえ、喜んでOKですよ！ ボス！」

劉は少し微笑むと真田の顔を見つめた。

第二章 電子新聞

石川はIPLSIの電極接合試作品をポッティングするとUV光照射装置のスイッチをいれた。

IPLSIはインテリジェントパワーLSIの略号

ポッティングとは液状樹脂でチップを保護する半導体の封止工法。

UVは紫外線のこと、紫外線で樹脂を化学反応させる。

「よし！ 完成だ！ ついに出来たぞ！ 真田オリジナルだ！」

石川は出来上がったサンプルを眺めると満足そうに呟いた。

そのサンプルはA4サイズのフィルムの様な基材の片隅に接合されていた。

ポッティングサイズは7mm位で、透明樹脂の中には5mm□のブラックチップが接合されてあった。

石川はサンプルを持ってクリーンルームを出ると技術事務所のドアにセキュリティカードをかざした。

チエック音が鳴って照合サインがグリーンに点灯すると自動ドアが開いた。

「真田さん！ とうとう出来ましたよ！」

石川は真田に挨拶をすると少し興奮した表情でサンプルを見せた。

「おっ！ 石川君！ 出来たか！」

真田も少し興奮気味に石川の持っているサンプルを眺めた。

「よし！ そのミーティングルームで動作させてみよか！」
「はい、そうしましょう！」

真田は居室の奥にあるミーティングルームのドアを開けて石川と中へ入った。

「あつ、そうや、劉さんも来てくれ」

真田は振り向くとデスクに座っている劉麗華を呼んだ。

「はい」

劉は返事をするときミーティングルームの中に一緒に入った。

「えっ？ 誰ですか？」

石川は劉麗華の顔を見てから真田の方を向いて問いかけた。

「ああ、紹介を忘れてたな、劉麗華や」

「劉さん？」

「C M D 上海有限公司の劉麗華です、よろしくお願いします」

「劉さんは、会議の為に俺が中国から呼んだんや、技術通訳や」

「そうですか、私は新光技術工業社の石川です、よろしく願います」

「えっ？ 新光技術・・・C M D 社の社員じゃないのですか？」

劉は少し不思議そうに石川の顔を見た。

「ああ、石川君には半導体組立工法の開発支援をもらっている

んや」

「組立工法の開発支援ですか？」

「ああ、新光技術工業社とC M D社は技術提携してるんや、新光の技術者は優秀な人材が多いさかいな」

「そうですか！ 石川さん！ 中国にも技術支援してくださいね！」

劉麗華は石川の手を取ると握手をした。

「はっ、はい」

石川の顔が少し赤くなった。

「ははは、石川君ちよつと顔が赤いな」

真田が冷やかした。

「えっ」

石川は照れくさそうに少し頭を掻いた。

「よし、それじゃあ！ 動作実験をして見ようか！」

「真田さん、質問があります、このサンプルはどういう代物なんですか？」

劉麗華が訪ねた。

「あつ、そうか！ 劉さんにサンプルのことを説明してへんかったなあ！」

「はい、教えて下さい」

「このサンプルは電子新聞の試作サンプルなんや」

「電子新聞？」

「折り曲げが可能な新しい表示パネルや」

「えっ？ 折り曲げてても映るんですか？」

「そうや、今までの液晶やPDPと違ってとても柔らかい素材で作った表示パネルや、薄みは0.05mmやな」

「0.05mmですって！」

「本当はもつと薄く作れるんやけど、まあ、試作品やから表面の保護膜をちよつと厚めにしてあるんや」

「えっ！ これでも厚めですか！ なんて薄いの！」

「有機パネルって言うんですよ、薄いけどフルカラーの発光表示が可能なんです」

石川が真田の説明を補足した。

「CMD社が開発したんですか？」

「いや、この商品はOSLED社と言う日本のメーカーが開発したんです」

「えっ？ それじゃあ何故CMD社でサンプル試作をしているの？」

劉麗華が首を少し傾げて質問をした。

「我々はこの有機パネルの駆動回路と電源供給回路を開発しているんや、それがこのチップや、これが無いとこの有機パネルは動かせないな」

真田はそう言うサンプルの右下にある小さなチップを指さした。

劉麗華は感嘆しながら小さなチップを眺めた。

真田はポケットからスマートフォンを取り出した。

「このスマートフォンにはIPLESIを駆動させる基本ソフトウェア

アと電子新聞のデモデータが入ってるんや、石川君、そのサンプルをここに置いてくれ」

「はい」

真田は机に置かれたサンプルにスマートフォンを近づけた。

「IPLSIに最初は基本ソフトウェアを非接触でインストールさせるから10分程かかるが、その後の電子新聞のデモデータ転送とマイクロ波電力送信は瞬間で終わる、基本的に1分もあればこのサンプルに電力供給と情報送信は出来るんや」

真田はスマートフォンの画面をクリックして基本ソフトウェアのインストールを始めた。しばらくしてA4サイズの電子新聞サンプルの中央部にCMD社のロゴが浮かび上がった。

「よし、基本ソフトウェアのインストールは完了や、デモデータを転送してニュースを表示させるぞ!」

真田はスマートフォンの画面をクリックしてデータ転送ボタンを押した。スマートフォンからデータ送信が始まると電子新聞は色鮮やかにニュース画像を映し出した。

「よっしゃあ、成功や!」

「うわっ、なんて綺麗なの! これ!」

「石川君、電子新聞を広げてくれ!」

「はい、真田さん!」

「えっ? 広げるって?」

「新聞だから広げるんですよ、麗華さん!」

石川は少し悪戯な視線で劉麗華を見上げると、サンプルの端を掴んで電子新聞を広げた。電子新聞はまるで本物の紙の様に普通の新聞サイズに広がった。

「これが電子新聞なのね！ 凄いわ！ しかもなんて綺麗なのかしら！」

3人はCMD社の小さなミーティングルームで新しい時代の幕開けを感じた。

第三章 エージェント

午後14時

真田は特別会議室のドアを開けると会議の準備を始めた。

ネットワークケーブルをコンセントに差し込んで会議システムのスイッチを入れると天井から表示スクリーンを下ろした。

「劉さん、すまんけどちょっと会議の準備を手伝ってくれるか」

「はい、何をすればよろしいですか」

「まず、秘書課にこれを持って行ってくれ」

そう言うつと真田は劉にメモを渡した。

劉はメモを受け取ると内容を確認した。

「えっと、プレゼン資料の印刷と飲み物の手配ですね」

「そや、プレゼン資料は10人分を印刷して、飲み物は秘書課に依頼してくれ」

「はい、わかりました」

「会議は15時から始める予定やから飲み物は15時に持ってくるように指示してくれたらええわ」

「了解です、ボス」

「劉さん、ボスはええて」

「はい、ボス」

真田は劉を見て少し笑うと頭をかいた。

午後14時50分

真田は特別会議室の窓から会社の保安所を眺めていた。

保安所の前ではスーツ姿の来客3名が入社の手続きを行なってい

た。

真田が視線を社道の方に移すとスーツ姿の別の来客が3名歩いているのが見えた。

保安所の3名は手続きが終わった様子で真田のいる事務練に向かつて歩いて来た。

「来たな、結城と神崎」

真田は窓から目を離すとポケットからPHSを取り出した。

「はい、劉です」

「劉さん、来客が3名、事務練の玄関にくるさかい、会議室まで案内してくれるか」

「はい」

「別の3名が少し遅れて入ってくるけど、そっちの方は石川君が案内してくれるからええわ」

「了解です、ボス」

真田はPHSの電源を切ると会議室の席に座って両手を合わせた。しばらくして会議室のドアをノックする音が聞こえた。

「失礼します」

劉が会議室のドアを開けた。

ドアの向こうにはスーツ姿の男性が3名立っていた。

「ようこそCMD社へ！」

真田は席を立つとドアまで歩寄って来客者に手を差し出した。

「？欢迎来到C M D公司！」

劉が真田の挨拶をすかさず中国語に訳した。

「？好！」

来客は中国後で真田に挨拶を返した。

彼らは蘇州OSLED有限公司の社員だった。

「我是沈清明」

「我是夏夢竜」

「こちらは沈さんと夏さんです」

劉が中国語で通訳をした。

「真田先生、好久不見了、我是結城秀樹」

「真田さんお久しぶりです・・・ えっ？ あなたは日本人じゃないですか？」

劉は中国語で通訳をしかけたが途中でやめた。

「おいおい、結城、日本語で話せや」

「ははは、失礼しました。真田先輩、お久しぶりです」

「ほんまや、久しぶりやな、結城、6年ぶり位か」

「そうですね」

結城は笑いながら真田と話した。

「こちらの方は真田さんのお知り合いですか」

「ああ、大学の後輩やね、フレキシブル半導体の天才技術者や」

「あはは、それは言い過ぎですよ、凡人ですよ僕は、真田さん見たいな人を天才と言っんですよ」

「まあ、俺は確かに天才やけどなあ」

「あはは・・・先輩は変わってないなあ」

結城は愉快そうにまた笑った。

「結城、まあ、座ってくれ」

「？到？？来」

劉が3人を席に案内した。

「失礼します」

続けて石川が会議室の中に入って来た。

「真田さん、神崎と相川と深淵が来ました」

「おお、石川君、ご苦労さん」

石川が真田に挨拶をすると新光技術工業社の3人が会議室に入ってきた。

「失礼します」

新光技術工業社の4人は会議室のメンバーに頭を下げると中に入った。

「ああ、神崎たちはこっちに座れ」
「はい」

神崎たちは真田に指示されてCMD社側の席に座った。

「あれ？ 神崎じゃないか！」

「えっ！ あっ！ 結城先輩！」

神崎は前の席にいるOSLED社の結城を見て驚いた。
彼も真田と同じく大学の先輩だった。

「お久しぶりですね、結城先輩！」

「ああ、ほんとに、大学を卒業して以来かなあ」
「そうですね」

神崎と結城は懐かしそうに話した。

「ボス、こちらの方たちもお知り合いですか」

劉が真田に訪ねた。

「ああ、石川君の同僚で新光技術工業社の半導体製造工法開発チームのメンバーや」

「そうですか」

「それから神崎は結城と同じく俺の大学時代の後輩なんや」

「神崎さん、上海CMD有限公司の劉麗華です。よろしく願います」

劉は神崎と新光技術工業社のメンバーに頭を下げた。

「新光技術工業社の神崎です。よろしくお願いします」

神崎も劉に頭を下げた。

「よし、メンバーは全員揃ったな、それじゃあ会議の前に名刺を交換しよう」

真田はポケットから名刺を取り出すとOSLED社のメンバーと名刺交換を始めた。

神崎たちも名刺を取り出してOSLED社のメンバーとCMD社の劉麗華に渡した。

神崎は受け取った名刺を机の上に並べた。

OSLED株式会社開発本部 本部長 結城秀樹
蘇州OSLED有限公司 制造技?部 主任工程? 沈清明
蘇州OSLED有限公司 生?技?部 主任工程? 夏夢竜
上海CMD有限公司 ?量控制技?部 劉麗華

「うわっ、中国語だ、結城さん以外は読めないなあ・・・」

「真理ちゃん、名刺貰ったけど読めないね」

「深淵さん私も読めないですよ」

神崎と深淵と相川は小声で呟きながら顔を見合わせていた。

「製造技術部主任技師 沈清明、生産技術部主任技師 夏夢竜、品質管理技術部 劉麗華って書いてあるんだよ」

石川が横から3人に小声で教えた。

「あつ、そっか、石川さんは上海新光技術工業社にいたんだもんね、中国語得意よね」

相川が石川に小声で話すと、神崎と深淵がうんうんと横でうなず

いた。

3人の仕草が少し滑稽に見えたのか、劉麗華が口を少し手で押さえて笑いをこらえていた。

「それじゃあ、会議を始めよう、劉さん通訳をお願いするよ」
「了解です。ボス」

真田はOSLED社との技術会議を始めた。

第四章 商品企画サンプル

席に着いた真田は手元のレジユメを手にとると話始めた。

レジユメ「フランス語」本来の意味は要約、概要。紙に会議内容を簡潔にまとめたもの。

「OSLED社と新光技術工業社の皆さん、本日はお忙しいところ会議に参集頂きましてありがとうございます。本日の会議はOSLED社とCMD社の新商品共同開発企画についての事前会議となります」

「OSLED公司和新光技？工？公司的？位今天辛苦了．．．etc．．．」

劉麗華は同時通訳を始めた。

「手元のレジユメをご覧ください」

会議メンバーは手元に置かれたレジユメを確認した。

「まず始めに共同開発を行う新商品ですが、現在8つの商品が企画されています。1．電子新聞 2．電子広告 3．電子スクリーン 4．電子ブック 5．電子カード 6．電子壁紙 7．電子照明 8．電子プリントです。レジユメの3ページを見て下さい」

神崎はレジユメをめくって3ページを開いた。

「あれ？ ミスプリントかな？」

「あつ、レジユメの3ページは真つ白ですよ神崎さん」

相川はそう言つと神崎の顔を見た。

「真田さん、すみません、レジュメの3ページがミスプリントの様です」

神崎が真田に手を上げて言った。

「いや、神崎、ミスプリントじゃないんや、これから説明するさかいな」

「んんっ？」

神崎は真田に目を合わせると首を傾げた。

「面白いことが起こりますよ神崎さん」

横から石川が神崎に声をかけた。

「えっ、何だつて」

神崎が振り向くと石川は少し笑みを浮かべて親指を立てる仕草をした。

「レジュメの3ページで紙の右端を少し押して見て下さい、この部分ですわ」

真田はそう言つとレジュメを手にとって会議メンバーに説明した。神崎は真田の言う通りに紙の右端を少し押して見た。

「あっ！」

「あれ？」

「うわっ 凄い！」

神崎と相川と深淵は驚いて思わず声を出した。紙にはカラーで文字や絵が映し出された。一部は動画で映っている。

「レジユメの3ページは電子ペーパーになっているんや、神崎」

神崎と相川と深淵は信じられないと言う表情でレジユメを眺めた。石川はレジユメが電子ペーパーであることを知っていたので冷静だった。

「好、好」

「好、是好的？量」

沈清明と夏夢竜は手にレジユメを持つと正面から見たり横から見たり裏を見たりしていた。

OSLEDのメンバーはそれが電子ペーパーであることをわかっていたらしいが、その高品質さに驚いている様だった。結城だけが冷静にレジユメを見ていた。

「まあまあ の出来でしょう、真田さん」

結城はレジユメを手に持つと真田に意見を求めた。

「いや、結城、完璧や、これが紙か電子ペーパーかわからん位やからな」

真田はそう言つと結城を見て笑った。

「このレジユメが全ての商品の基礎となる電子ペーパーです」

「これが電子ペーパーなのか、始めて見たな」

「神崎さんこれ、本物の紙みたいですよ」

「神崎さんこれは凄いですね」

神崎と相川と深淵は顔を見合わせた。

「この電子ペーパーの応用として1〜8の商品を企画して行きます。技術的にこのA4サイズまでの商品は既に量産が可能な状況まで技術確立が出来ています。すぐにも商品化出来る状態にあります。電子ブック、電子カードは量産可能な状態にあると言っていますが、その他の商品はサイズが大きいので同じ工法で商品は作れません。技術的な問題が解決したとしても日本で製造するとコストが全く合いませんので海外工場で作ることになります」

真田は淡々と話を続けた。

「今日は商品の試作サンプルとしてこの企画商品を全てこの会議室に用意しました。サンプルのOLEDシートはOSLED社製、電源供給回路と表示用アクティブマトリクス駆動回路はCMD社製です」

OLEDはオーガニックルミネセンスエレクトロダイオードのことで、日本ではOEL或いは単純にELと呼ぶ。

アクティブマトリクス駆動とはX方向とY方向に導線を張り巡らして電圧をかける駆動に加えてアクティブ素子を配置したもので目的のポジションだけに信号を与えることが出来る表示パネルの駆動方式を言う。アクティブマトリクス型ではTFT方式が有名。TFT（シンフィルムトランジスタ：薄膜状トランジスタ）

「石川君ちよっとサンプルをテーブルの上に並べてくれるか」

「了解です、真理ちゃんちよつと手伝つて」
「はい、石川さん」

石川と相川は席を立つと後ろに置いてあつた箱から商品サンプルを取り出して机の上に並べた。

「真田さん、完了です」
「よし」

テーブルには電子新聞、電子広告、電子ブック、電子カード、電子プリントの5種類のサンプルが並べられた。

真田は席を立つとそれぞれのサンプルにスマートフォンを近づけた。

OSLED社のメンバーと新光技術工業社のメンバーも席を立て真田の作業を見つめた。

真田は電子新聞をテーブルの上で広げて見せた。

電子新聞は色鮮やかにニュースのデモデーターを映し出した。

「おお」
「好了、好了」

OSLED社のメンバーと新光技術工業社のメンバーは感嘆の声を上げた。

「まず、これが電子新聞や、今回の企画商品の中で最も重要なサンプルや」

「？个商品最重要・・・etc・・・」

「真田さん、この商品の中で新聞が何故最重要なんですか？」

神崎が真田に質問した。

「新聞は毎日読むものやろう、企画商品の中で最も需要が見込める商品や、これがヒットしたら莫大な利益が生まれるんや、その他の商品もまあ確実に需要はあるが新聞には勝てへんさかいな」

「なるほど、だから電子新聞が最重要商品なんですね」

「そう言うことじゃ」

「次はこれや、電子広告や、ポスターやと思ったらええわ、電車の中の宣伝とか駅とかホールに貼るんや」

「へえ」これも凄い需要が見込めそうですね」

「ああ、これも半端やないで、そこらじゅうの看板はみんなこれに置き換わるさかいな」

「次は電子プリントやTシャツに有機ELを印刷してあるんや」

「これは究極ですね、洗濯しても大丈夫なんですか」

「いやそれはさすがにあかんけど、まあ使い道は色々やな、応用が効く商品や、服に縫い込んでもいいし、子供のランドセルとか、カバンに縫い込んででもええやろう」

「次は電子ブックと電子カードやけどこれはもう現在でもあるさかいインパクトはあまりないな」

「いえそれでもこの薄さはインパクトがありますよ」

真田はOSLED社のメンバーと新光技術工業社のメンバーに次々と企画商品サンプルの説明を行なった。OSLEDのメンバーも電子ペーパー自体の製品開発は行なっているものの最終商品としての製品サンプルは見たことが無い様で驚きを隠せない表情だ。ただし、結城だけは冷静にサンプルを観察していた。

「よしそれじゃあ席に着いてくれ」

真田はみんなを席に座らせた。

「次は机上のサンプル以外の大型商品デモや」

「劉さん天井照明を消してくれるか」

「はいボス」

劉が真田の指示を受けて会議室の天井照明を消すと会議室が薄暗くなった。

「まず電子スクリーンや」

真田がリモコンのスイッチを押すと会議室の大型スクリーンが瞬時に点灯して、バスケットの試合風景が色鮮やかな映像で映し出された。

「うわっ、凄い綺麗だ！」

「好了！ 好了！」

「次は電子照明」

真田が別のリモコンを押すと天井全体が瞬時に明るくなった。

「うわっ、なんだこれ！ 天井全体が有機ELパネルなのか！」

「次は電子壁紙や」

真田がまた別のリモコンを押すと今度は壁全体が光出して白色から赤色や青色に点灯した。

「おまけや」

真田はそう言うと2つのリモコンを同時に操作してボタンを押した。

天井と壁にバスケットの試合風景がフルカラーで映し出されて3

60°のフルスクリーンに変わった。

会議メンバーたちは放心状態で壁に映るフルカラーの映像をただ眺めた。

これが次世代のELパネルなのか・・・俺たちは今ここで未来を見ているんだ！

神崎は心の中で叫んだ。

第五章 フライト

ヘッドホンを耳にかけて座席に備え付けのリモコンを操作するとイヤホンからスローテンポなクロスオーバーミュージックが流れた。

「さてと．．．」

神崎は膝下に置いた技術論文を手にとって開くと読み始めた。

「電子キャリアの再結合で発光を得る導電性高分子．．．発光材料は共役系高分子と非共役系高分子．．．導電性と発光性はトレードオフの関係か．．．共役系高分子ポリパラフェニレンビレン．．．アルキルメトキシ基（ $\text{C}_n\text{H}_{2n+1}\text{O}-$ ）の導入．．．非共役系高分子はビニルポリマーが骨格か．．．難しいなあこれは」

神崎は小声で小さく呟くと頭を掻いた。

「お姉さん、ワイン頂だい！」

「はい、白がよろしいですか？ 赤がよろしいですか？」

「赤でお願いしあっス！」

田町はフライトアテンダントに3本目のワインを注文した。

フライトアテンダントはワゴンから赤ワインの小瓶を取出すと田町に渡した。

「3本目ですよ、田町さん」

「美味しいわよ、これ、しかも無料っスよ、石川ちゃんも飲む？」

「上海着くまでに出来上がっちゃうんじゃないですか？」

「ははは、まだまだだよ、序の口じゃん！」

田町は顔を少し傾げて石川に軽くウインクすると嬉しそうに笑った。

石川は肩を少し軽く上げると、隣の席にいる深淵の顔を見た。

深淵は少しいびきをかきながら心地良く爆睡していた。

先日、CMD社の新商品インテリジェントパワーLSI（通称IPLSI）が有機半導体パネルメーカーOSLED社に採用されることが決定した。OSLED社はCMD社にIPLSIの部品供給と次世代ELパネルの共同開発に関する技術提携を申し入れてCMD社はこれを正式に受諾した。これを受けて真田は蘇州CMD有限公司の工場拡張と組立開発本部を作る準備を始めた。

また、OSLED社はCMD社の技術提携社である新光技術工業社にも次世代ELパネルの共同開発に関する技術提携を申し入れて新光工業社もこれを正式に受諾した。新光技術工業社も小さいながら蘇州に事務所を作る準備を始めた。

神崎たちは次世代ELパネルとインテリジェントパワーLSIを融合させるべく、製造工法開発ソリューション技術チームとして新光技術工業社本社からOSLED社に派遣されることとなった。

いま、中国の蘇州工業新区でOSLED社の次世代ELパネルの最新鋭工場が建設されようとしていた。

ポーンとスピーカーから音が鳴って座席ベルトの着用サインが点灯するとフライトアテンダントのアナウンスが流れた

「皆様、本日はAXA航空をご利用頂きましてありがとうございます。本日の上海のお天気は曇、気温は22 でございます。まもな

く上海浦東国際空港に着陸いたします。座席のリクライニング、フットレスト、前のテーブルを元の位置にお戻しく下さい。ただ今を持ちまして機内サービスを終了させていただきます」

さらに機長のアナウンスが入った。

「皆様、本機はこれより着陸体制に入ります。気流の悪いところを通過致しますので、座席ベルトをしっかりとおしめ下さい」

飛行機が高度をぐんぐんと落として雲の中に入ると、がたがたと機体が震え始めた。

「うわっ、耳が痛いっスね、エレベーター見たいっス」

田町が少し気持ち悪そうに言った。

しばらくして雲を抜けると窓の外の視界が急に開けて飛行機は旋回を始めた。

「神崎さん海が見えるわ、茶色い海ね」

相川が窓の外を眺めて言った。

「本当だ、大陸の色だな」

神崎が相川に答えると飛行機は更に旋回して滑走路を目指し始めた。

飛行機は高度を落として滑走路に照準を合わせた。

「見えた！ 滑走路！」

相川は初めての着陸に少々興奮気味の様だ。

飛行機が滑走路に接地するとドーンと大きな音がして機体が大きく揺れ、エンジンの逆噴射が始まった。

「うわっ凄い！」

相川が声を上げた。

しばらくしてスピードが急激に落ちると機内が静かになり飛行機はターミナルへと滑走を始めた。

「皆様、本日はAXA航空をご利用くださいまして、誠にありがとうございます。皆様にもたお会いできる日を、客室乗務員一同心よりお待ち申し上げます」

飛行機がターミナルに着いて最後の機内放送が入ると乗客は安全ベルトを外して荷物を降ろし始めた。

「さあ、着いたぞ！ 中国だ！」

神崎は両手の拳を握りしめた。

第六章 中国入国

飛行機の機内からボーディングブリッジを通り抜けてターミナルに入ると石川がメンバーに声をかけた。

「皆さん、出入国カードはもう記入してますよね」
「このこと？」

田町はポケットから白紙の出入国カードを出すと石川に見せた。

「あちゃー、田町さん早く書いて下さいよ」
「どうやって書くの」
「わたしもまだです」
「あつ、俺も寝てたからまだ書いてないよ」

相川と深淵も石川に白紙の出入国カードを見せた。

「それ書かないと入国出来ないですからね」

石川は両手を上げると頭の上で手を組んだ。

「神崎さんは大丈夫ですよね」
「ああ、出発前に国内で記入したからね」

神崎はポケットからカードを取り出すと石川に見せた。

「うん、神崎さんはOKですね」
「田町さん、相川さん、俺のを見せますから真似して記入して下さい」

田町と相川はボールペンを取り出すと石川の出入国カードを見ながら急いで自分のカードに記入した。

深淵もその横で出入国カードに記入した。

「よしOK」

「ありがとう、石川ちゃん、助かりまっス」

「田町さん、パスポートとビザは大丈夫ですよね」

「大丈夫っスよ、ほら」

田町はポケットからパスポートを取出すと石川に見せた。

「うん、OK」

石川は田町のパスポートを手にとって確認するとOKサインを出した。

「石川君は頼りになるなあ」

「ここは外国ですからね、自分の身は自分で守るのが基本です」

「石川ちゃん！ カッコイイ！」

「田町さんが一番危ないですから」

「えっ？」

田町は右目を瞑って両手を小さく上げると顔を少し歪めた。

「そうだな、田町気をつけろよ、石川君が言う通りここは日本じゃないからな」

「はい、わかりました、神崎チームリーダー！」

田町は右手を額に当てると神崎に敬礼した。

「それじゃあ、みんな入国審査が終ったら荷物を受け取って9番ゲートで待ち合わせだ」

「はい」

メンバーは返事をするとう空港のターミナル通路を歩き始めた。

「ねえ、真理ちゃん、見て見て、壁のポスターボードの広告表示がみんな中国語よ、それに綺麗だし」

「田町先輩、ほんとに綺麗ですよね」

「デジタルサイネージだよ」

「えっ？ デジタルサイネージ？」

「電子看板のことさ、平面ディスプレイやプロジェクタで映像や情報を表示する広告媒体さ」

「電子看板？」

「我々がこれから作ろうとしているE.Lパネルがこの広告媒体の世界にもうすぐ革新を起こすんだ」

神崎はムービングウォーク（動く歩道）から見える電子看板を見ながら田町と相川に話した。

「さあ、入国審査のゲートに着きましたよ、急ぎましょう」

石川に促されてメンバーたちは空いている入国審査のゲートにそれぞれ入った。

「不要？入！」

「へっ？」

田町が審査の順番待ちで手前に引いてあるラインを越えると審査

官が怒った。

「田町さん、そのラインの手前に戻って下さい」

石川が横のゲートから田町に注意した。

「私、何か悪いことしたの、石川ちゃん」

「ええ、田町さん、そのラインはまだ越えないで下さい」

「えっ？」

「前の人が入国審査中ですからね、審査官が呼んでからそのラインを越えて下さい」

「・・・？」

「そのラインを越えたところから中国なんですよ」
「了解」

田町はラインの後ろへ下がった。

入国審査が終わるとメンバーは荷物の受け取りと税関申告を済ませて9番ゲートで待ち合わせた。

「ああ、怖かった、入国審査」

「だから言ったでしょう田町さん、ここは外国ですからね、気を付けて下さいよ」

「はい、分かりましたっす、石川ちゃん！」

田町は額に手をあてると石川に敬礼した。

「はぁ・・・」

「大丈夫、大丈夫」

田町が石川の肩をポンと軽く叩いた。

「だめだこりゃ」

石川は両手を少し上に上げると天を仰いだ。

神崎は少し笑いながら背広の袖をまくると腕時計で時間を確認した。

そのとき神崎の後ろから声が聞こえた。

「大家？迎向中国！」

神崎が振り向くと劉麗華が後ろに立っていた。

「みなさん、ようこそ中国へ」

劉麗華は新光のメンバーに頭を下げるとニコッと笑った。

「あつ、劉さんご苦労様です」

神崎と新光のメンバーは劉に頭を下げた。

「あちらにホテルのタクシーを用意してありますから皆さんそれに乗って下さい」

劉は真田に頼まれて新光のメンバーを蘇州まで送り届ける指示を受けていた。

劉はタクシーの運転手を呼ぶと田町と相川のトランクを運ばせた。

「さあ、それじゃ、行きましょうか」

神崎たちは劉の後を追ってタクシーの待つ空港駐車場まで歩き始めた。

「劉さん、わざわざ迎えに来て頂いてありがとうございます」
「いえ、仕事ですから、皆さんもフライトでお疲れでしょう」
「2時間半位のフライトですから対したことはありませんよ」

石川が劉に答えた。

少し歩いて駐車場に着くと大型タクシーが用意されてあった。
運転手は全員の荷物を後部のトランクに積み込むとドアを閉めた。
メンバー達がタクシーに乗り込むと最後に劉が神崎の座席の横に座ってタクシーのドアを閉めた。

「さあ、それじゃあ出発しますね、神崎さん」
「OKです」

タクシーは空港の駐車場を出ると高速道路に入り蘇州へと走り始めた。

第七章 滬寧高速

タクシーは上海のインターチェンジで高速道路を一旦降りて市内に入った。

「上海市内を通り抜けて別の高速道路に乗り換えます」

劉麗華は神崎にそう言うと言いつと運転手にルートを指示した。

「みなさん、もし上海で見たい場所があったら言ってお下さいね」

劉は後ろを振り返ると新光のメンバーたちの顔を見た。

「不要、不要、劉先生、？直接去」

「そうですか」

「お気遣い無く」

石川が劉に答えた。

「そうだね、今日は仕事で来ますから現場に直行でいいですよ、劉さん」

神崎が劉に小さく手を振った。

「はい、それじゃあ、蘇州に直行します」

劉がもう一度タクシーの運転手に話かけると運転手は頷いてハンドルを切った。

「ねえ石川ちゃん、あの高いタワーみたいの何？」

田町はタクシーの窓から見える大きな塔を指さした。

「あれはテレビ塔です」

「あれが有名なテレビ塔っすか」

「ええ、東方明珠タワーって言います」

「へえ、そうなの」

「一番上まで登ると上海が一望出来て綺麗ですよ、特に夜景が綺麗ですね」

「夜景っすか、石川ちゃんは夜に誰と登ったの？」

「えっ、いや、誰って、会社の人ですよ、ははは・・・」

石川は口元に手を当てると目をキョロキョロした。

「あれえ、石川ちゃん・・・怪しいっすねえ・・・これっすか？」

田町は石川の顔を下から悪戯な視線で覗き込むと小指を立てた。

「いえ、いえ」

石川は膝の上で手を小さく振った。

「ふっん、石川ちゃん」

「いや、だから違うって」

石川はまた膝の上で手を小さく振ると田町の小指を折った。

「田町先輩、見て見て、バイクがいっぱい走ってるわよ」

「ほんとねえ真理ちゃん、中国って自転車のイメージだったんだけ

どバイクばかりねえ」

「相川さん、あれはみんな電動バイクなんですよ」

「ええっ、そうなんですか石川さん」

「ええ、あの電動バイクは家庭用のコンセントで充電するタイプです」

「へえ、中国の方が日本より進んでいるんですね」

「ええ、日本もあれにすればいいと思うんですけどね」

「ほんとね、なぜ日本はあれにしないのかしら」

相川は少し伸びをするとまた窓の外を関心深げに眺めた。

タクシーは都心の裏通りを通ると上海市内の高層マンション街を通り抜けて上海から南京につながる滬寧高速道路に侵入した。高速道路を少し走ると窓の外の景色が変わり田舎の田園風景が見えてきた。

「劉さん、蘇州の到着時間は何時位ですか」

「えーと、高速は1時間位ですから蘇州インターの到着時間は15時30分位ですね」

神崎は腕時計を見て時間を確認すると劉の顔をもう一度見た。

「ホテルに着く前に蘇州CMD社に行きたいのですが、宜しいですか」

「大丈夫ですよ、でも今日は移動だけの予定でしたよね」

「ええ、ちよつと真田さんに挨拶しておきたいと思ひまして」

「わかりました」

劉は胸のポケットから社用の携帯を取り出すと真田に電話をかけた。

「はい、真田です」

「ボス、劉です」

「ああ、劉さんか、ご苦労さんやなあ」

「はい、あの、神崎さんが今日、蘇州CMD社に寄りたいと言ってますがOKですか」

「何時位や」

「えーと、15時40分位です」

「そうか、ちよつと待てよ、技術移管会議は15時までか・・・うん大丈夫やなあ、OKや」

「わかりました、じゃあ15時40分に工場に入ります」

「了解や、気をつけてな」

「はい」

劉は携帯のボタンを押して電話を切った。

「神崎さんOKです」

「了解です」

神崎は劉麗華に礼をすると小さく手を上げた。

15時30分

タクシーは蘇州のインターチェンジを降りて市内に入った。

「?去????工?区」

劉麗華はタクシーの運転手に蘇州CMD社の所在地を告げると工業区に行くように指示をした。

15時40分

タクシーは蘇州CMD社に到着した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9083x/>

シークレットナイトライド3

2012年1月15日04時50分発行